

IV. 高等部

学部研究テーマ 「課題選択学習における『わかる』『できる』支援のあり方」

1. 研究の概要

(1) テーマ設定の理由

①生徒の実態

高等部には現在26名（男子15女子11）の生徒が在籍している。

ここ数年連絡進学生徒の障害の多様化の傾向が顕著に見られる。一方、通常学級もしくは特殊学級から毎年1～3名入学してきており、高等部全体として社会性・知的な面、身体的能力でも様々な生徒のいる、個性豊かな集団であるといえる。

学校生活においては目的をもって行動力あふれた活動をする生徒もいるが、ある特定の活動を繰り返すだけで行動に広がりがないという印象もある。またただ漫然と過ごしている生徒もいる。それでは彼らには何に対しても興味・関心がないのかということ決してそうではないようである。身の回りの事物や事象に対しては興味・関心があり随所に「何かをしたい」「わかりたい」「できるようにになりたい」といった気持ちの発露が見られる。しかし、そのサインは見逃されがちであり、本人もうまく表現できていない場合が多いようである。「わからない」「できない」で立ち止まるのではなく必要な支援を受け自分は何ができるのか、何が心から好きなのかを気づかせること、そして同時にそのことに対して主体的、積極的に取り組む態度を育てることが大切ではないかと考える。

②過去の研究から

本校では、昨年まで「豊かな心と生活をめざして」というテーマで研究を進めてきた。また、これに並行して教育課程の再編の作業を行った。これらの活動を通して、高等部の教育が大切にしてきたこと、しなければいけないことについて話し合う機会をもつことができた。

まず「生徒本人の意思からの取り組みを大切にする」ことが重要と考えて、教育活動のいろいろな機会を捉えてできるだけ選択肢を準備し、生徒が自己選択・自己決定でき、主体的に学習を進めていけるように支援してきた。

さらに「生徒を主体者として尊重する姿勢をもつ」よう心がける。生徒たちの知的発達レベルは様々であるが、生活経験から培われた情操や思春期の複雑な感情、周囲の人々や異性に対する気持ちの変化などを考慮すれば、年齢相応の対応をすべきであると考えている。また、「伸びゆく存在としての生徒の可能性を信じる」ことも大切である。学習活動を一つの方向に絞るのではなく、多方面にわたる活動の中からその可能性を探っていく。するとある学習では見つけられなかった生徒の長所やつまづきが他の学習で見つけられたり、その子らしさが遊びの中で見られたりすることもある。

③保護者との連携

もちろん、この生徒たちの教育は学校現場のみで行われるのではなく「保護者との連携」

がなされなければならない。

高等部では一人一人にできるだけ明確な課題を提示していく方向で学習を計画実施していきたいと考え、4月当初、保護者に対して「身辺自立」「学習面」「コミュニケーション」「余暇」その他について、例年アンケートを行っている。保護者の生徒に対する現在及び将来的な願いや希望を、可能な限り教育活動に活かしていきたいと考えている。

高等部では特に進路指導が非常に重要な位置をしめており、1年生の職場見学、2・3年生の現場実習（産業現場等における実習）を積み重ね、徐々に卒業後の進路を決定していく。進路指導は、生徒本人、保護者、教師が密接な連携を取りながら、生徒個々の「特技」「特徴」「働く意欲・態度」「性格」等、そして保護者の「希望」や「家庭の実態」を考慮して決定している。

④研究テーマの設定

このように指導にあたるための理念的なもの、また環境作りについてはこれまでもかなりの検討・議論がなされてきた。

しかし昨年度の研究会の反省において、「生徒たちの変化を踏まえた上で生徒たちにわかる授業をしているのか」という問題提起があった。

総論的な見方より各論的な見方をしてみよう。理念より方法、それもすべての生徒たちが日々の生活や学習内容についてその意味・方法がわかるような手立てはないだろうか。できればそのわかり方、でき方から法則性を見だし、他の学習場面でも応用できるような、そしてその情報をすべての指導者が共有できるような研究が必要とされているのではないか、ということである。

実際、作業学習、グループ学習、芸術、体育など学年の枠を越えた集団での指導が多くなり、学部全体が生徒についてのあらゆる情報を知る必要がでてきた。しかし例えば個別の指導計画の作成に当たり、保護者のアンケート等をもとに一人一人の実態や目標、その手立てについて話し合いがもたれたが、なかなか具体的な意見が出てこない。私たち教師が生徒のことを本当に「わかっているのか」ということを突き付けられた形となった。

「何ができて何ができないのか」「何が好きなのか」「何が課題なのか」ということと同時にさらに踏み込んで「この子はどのようなものごとでのわかり方をしているのか」「わかるためにどのような声かけや手立てが必要か」「学習活動の中で教師の思いと生徒の実態の間にずれがなかったか。あったとすればどのように克服されたか」ということが教師間で共通にもつべき情報として必要になってきた。

以上のことから「『わかる』『できる』支援のあり方」を今年度の高等部の研究テーマとして設定することにした。

(2) 研究の方法

研究テーマに従って次のような活動を行った。まず、概要について述べた後に詳細な内容について言及していく。

①わたしたちの考える「わかる」「できる」について

テーマの決定を受けて、定義づけの意味も含めて私たちの考える「わかる」「できる」

について自由討論を行った。教師それぞれの教育観、指導観から様々な意見が出たが本校高等部がともに目指す「わかる」「できる」の共通認識ができたように思う。

②「わかる」ということについての文献研究

山鳥重氏著『『わかる』とはどういうことか—認識の脳科学』¹⁾などの先行研究や文献を通して医学的、心理学的見地から「わかる」という概念について学んだ。「わかる」にはいろいろな捉え方やプロセスがあること、そしてそのベースとなるものは「記憶」と「意欲」であることを学んだ。

③選択課題学習＝挑戦学習による実践研究

わかるための手立てをより具体的に考え、その中から「わかり方の法則性」を見いだすため、生徒たちが意欲をもって取り組み「わかり方」が見つかりやすいと思われる選択課題学習＝挑戦学習による実践を行った。

④生徒たちのわかり方を共通認識する

実践を研究し合う中で生徒のわかり方や支援の方法を共通の情報として理解した。

またこの内容を高等部内だけでなく次の指導者に伝えられるよう個別の指導計画や移行支援計画といった文書の作成に着手した。

(3) わたしたちの考える「わかる」「できる」について

本校高等部では教育目標として次のものをあげている

- ・健康な心と身体を育て、自立への能力や態度を養う
- ・自己選択・自己決定する場面や状況を通して、自分らしさを発揮し、より豊かな生活を送れるようにする
- ・地域の人たちとの関わりや公共施設の利用を通して、社会に参加する能力や態度を養う
- ・学ぶことを通して、生活に役立つ知識を身につけるとともに、さらに学びたいという気持ちを育む
- ・働くことを通して、有用性や自信を育て、社会生活や職業生活に見通しをもてるようにする
- ・いろいろな経験を通して、自分の好きなことやりたいことを見つけ、余暇利用に活かせるようにする

一読のとおり多くの項目において生徒たちが「わかる」ことが前提とされている。

自己選択のためには課題が「わかる」必要があり、知識を身につけるにもただ単語を覚えることでなくその本質が「わからなければ」ならない。見通しをもつためにはその事象と時間の経過について「わかる」必要があるのである。

「わかる」「できる」と一言でいっても多くの意味をはらんでいる。「わかる」「できる」の定義づけは本研究の根幹となるべきものであり、多くの時間を割いて検討された。ここではその内容について述べたい。

ア) わかるための基本はなにか

「わかる」ための基本、というより必要条件は「わかろう」とする意欲であり、生徒の

気持ちをそこにもっていくことが重要になってくる。生徒が自ら必要性を感じ、わかろうとする場合は良いのだがそれ以外の場合、生徒の実態に応じて興味・関心、意欲につながるきっかけを作るのが教師の仕事となってくる。

イ) 生徒に何をわかってもらいたいのか

当然生徒によって「わかってほしい」ことの内容も要求水準も異なる。

時間の経過（順番・順序）、位置関係といった基礎的なことから、コミュニケーションに必要な言葉、もしくは記号、生活における必要最小限のシステム、社会的規範などの理解が必要な生徒もいる。さらには自らものごとの本質をわかろうとし、わかった様々なことを状況に応じて選択し、適切な行動がとれるようになってほしい。

ウ) わかるための手立てはどうすればよいか

前述の教育目標でも「いろいろな経験を通して」とあるが、経験は「わかるため」の方策の一つであることは間違いない。しかしただ経験すれば何もかもがわかるというものではなく、経験の仕方、そしてその際の教師の指導が経験と理解を結びつけることになる。

そもそも生徒がものごとを「わかる」ためには、支援する教師が生徒のことをわかることが非常に重要になってくる。

生徒に関する知識をもつ。例えば各種検査によるデータや日々の生徒たちとの生活から得られる情報。今何に関心があるか（これは学習の動機づけにおいて重要である）。何ができるのかを知った上でどこまで教師が支援して、どこまで自分の力で解決させていくのか。そうすれば支援の際の技法、例えば繰り返しの言葉かけ、具体物の提示、教材・教具の利用、簡略化されたわかりやすい言葉の使用、映像化・記号化によるイメージ作り等々どのような手立てで生徒の理解を促すことができるかについて考えることができる。

さらに大切なのが、生徒が本当にわかっているか判断することである。

エ) 生徒がわかっているかどうかはどうしてわかるか

指導を受けた生徒がその内容をわかっているかどうかはどうしたらわかるのだろうか。例えば課題ができたとき、質問に答えられたとき、人に内容を伝えられたとき（つまり表現できたとき）などがそれにあたるだろう。また言葉でなく、表情、行動など非言語的な動きから読みとる必要がある場合もある。しかしその時、その評価が教師の主観にすぎず「わかっているつもり」になっているだけではないかと注意すべきである。

オ) 「わかる」と「できる」は違うが「できる」も認めていこう

さて、本研究では「わかる」と「できる」を併記している。銀林浩は「できる」とはやり方がわかること（手続きの習得）であり、訳がわかる（意味・内容の理解）とは異なっている。やり方がわかっても意味がわかったといえず、逆に意味を理解したからと言って手続きを身につけたといえない。と論じている。²⁾

しかし本研究では「わかる」と「できる」は違うが「できる」も「わかる」と同等に重要であることを認めていこうという立場をとることにした。

その理由として

i) 「できる」はいくつもの「わかる」の積み重ねから成立する場合が多い。例えば自動販売機でジュースを買うことができるためには、お金の種類や販売のシステム、約束

事がわかっていなければならない。

ii) 「できる」からものごとのシステムを「わかる」糸口になる。つまりできることを続けるうちに別の状況にも利用できる一般的な法則の発見につながる可能性があるということである。

iii) 「できた」ことに喜びを感じ、自分を評価し、次の行動への動機づけになる。ことがあげられる。

知識では「わかって」いても経験のないことは「できない」（自分の生活の中の行動とは直接結びつかない）ことが多い。自分で経験をし、それが何らかの意味をもつことで生活に位置づけられ、次に同じような経験をした時に、蓄積し、定着していく。「できる」からその子が「わかっている」とは決して言えないが、「できる」ことは「わかる」と不可分なものであると考える。

（４）選択課題学習＝挑戦学習による実践

挑戦学習とは教師が提示した課題の中から、生徒が自分のしたいものを選び挑戦する学習である。課題に対して主体的、積極的に取り組む態度と学び方を育てる学習であることから、昨年度よりこの挑戦学習を教育課程上「総合的な学習の時間」に位置づけている。

この学習は、教師側が生徒に身につけてほしいこと、余暇につながるようなことを課題として提示し、生徒がその中から自分の好きな課題を選択する。一定の練習期間の後、教師や他の友だちの前で成果を発表し審査を受けるというものである。このとき全審査員が合格を出すとパーフェクト合格と称してメダル等特別な表彰がなされ、これが練習の励みとなっている。

課題ごとの人数は未定であり高等部の教師全員が生徒の人数に応じてそれぞれの課題に分かれて支援を行う。各学期に1～2回実施しており、1回の実施は15時間程度である。

生徒にとって挑戦学習は自身が選択し、発表するというシステムなので、興味・関心や意欲をもちやすい。さらに一人一人がそれぞれに応じた具体的な到達目標をもち、自分のペースで練習に取り組めるものである。また教師にとっては、生徒にさせたい課題を純粋に抜き出せる。手立てがわかりやすく、その評価もはっきりしている。という特長をもち、生徒一人一人の具体的な課題をもとに、その「わかり方」を観察・記録・考察しやすい。

これまでも挑戦学習を研究対象としてきたこともあったが、それは主に卒業後の豊かな生活への活かし方や教科学習としての面についての研究であり、課題をどのように伝えるか、提示場面でも練習場面でも一人一人にどのような手立てをしてきたかについてはあまり言及されてきていなかった。また重度化・多様化してきた現在の高等部の生徒にとって、果たして本当に「わかりやすい」学習活動となっているかという疑問も出てきた。一つには先に述べた挑戦学習のシステムを「わからないまま」活動させられている生徒が多いのではないかと課題選択において教師はもっと「わかりやすい」提示方法を考える必要があるのではないかとということが問題になった。

（山崎晴生 荒木敏彦）